

大学生の汎用的技能に関する研究(6)

—高校生活における充実感と大学初年次生における汎用的技能、自己効力感、グリットとの関連性—

向 居 暁・佐 藤 純

1. 問題意識と目的

大学教育の質保証の観点から、大学教育における学習成果(ラーニング・アウトカム)を明らかにすることが要請されている。言い換えると、大学には、大学教育において、「教員が何を教えるか」ではなく、「学生が何ができるようになったか」ということに焦点を合わせて、大学教育における教育内容や教育方法の検討・改善が求められているということである。大学教育における学習成果として、学生が身につけることを期待される能力の一つに汎用的技能があげられる。汎用的技能とは、コミュニケーション能力、論理的・批判的思考力、課題発見・解決能力といった、学業だけではなく職業生活や社会生活においても必要となる基礎的な能力のことである(詳しくは、植村・向居, 2020参照)。このような汎用的技能を測定するために、植村・向居(2020)は、関連する先行研究を整理したうえで、「社会関係形成・参画力」(社会の中で役割を果たしながら、他者と関係を形成し、社会に参画する態度や能力)、「創造的問題解決力」(社会の中で創造性を発揮しながら問題解決する能力)、「自己主張・リーダーシップ力」(自分自身の意見を伝えながら、集団でリーダーシップを発揮する能力)、「批判的思考力」(物事を多面的に、批判的に考える能力)、「専門知識・知的面での自信」(大学で学習活動を行うために必要な知識)、「母語運用力」(母語を運用する能力)、「外国語運用力」(外国語を運用する能力)、「情報リテラシー」(情報処理機器を利用する能力)の8因子から構成される汎用的技能尺度を作成した。向居・植村(2020)は、この尺度を使用して、大学生生活の諸活動における意欲と汎用的技能との関連性を検討した。その結果、汎用的技能は、大学生生活における諸活動への意欲の中でも特に、勉学に対する意欲(正課内・外に関係なく)によって高められることが明らかになった。このような大学生生活の諸活動への意欲は、教職員の教育・指導活動とともに、学生エンゲージメント(e.g., 山田, 2018)としてとらえることが可能である。山田(2018)は、成果(アウトカム)に過度に依存するのではなく、教育・学習の過程(プロセス)を重視する必要性も指摘されてきているとし、我々が本来目を向けるべき対象は、学生の学びへの関与、すなわち、学生エンゲージメントであると主張する。また、この学生エンゲージメントは、大学の教育プログラムの特性とともに、アウトカムとしての汎用的技能の重要な規定因とされており、その可変性の高さからも大学教育において重要視されるべきものであると考えられている(小方, 2008)。これらの知見を踏まえ、向居他(2021)は、学生エンゲージメントとして学生生活における諸活動への意欲や教職員の教育・指導活動をとらえ、特にその関与が示唆されている勉学に対する意欲の向上を図りながら、アウトカムとしての汎用的技能の育成することが大学教育には求められると主張している。

また、向居他(2021)は、逆の観点から、汎用的技能が高い学生は、その技能を習得するまでに多くの経験、特に成功体験を積み重ねているため、自己効力感、すなわち、個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知(成田他, 1995)も高いと仮定し、その結果として、

汎用的技能が高いと自己認知する学生ほど、大学生活における諸活動に対して高い動機づけをもつと予測した。そこで、向居他(2021)は、大学初年次生の汎用的技能の自己認知とこれから始まる大学生活における意欲やキャリア活動への考え方の関連性を検討した結果、正課内・外の勉学に関する意欲には、特に「社会関係形成・参画力」が関与すること、そして、人間関係形成に関わる意欲については、この因子に加え、「自己主張・リーダーシップ力」が関与することなどを明らかにした。この向居他(2021)の結果と向居・植村(2020)の知見をあわせると、大学生活における諸活動への意欲と汎用的技能は互いに影響しあう関係性があると考えられるだろう。しかし、向居他(2021)では、自己効力感の指標が測定されていないことが問題点であったため、向居他(2022)においては、自己効力感とその形成に関与すると仮定される困難への挑戦心に関わる指標であるグリット(Eskreis-Winkler, et al., 2016; 竹橋他, 2019)を測定し、これらの特性と汎用的技能の関連性を明らかにしたうえで、汎用的技能に対する自己認知が、これから始まる大学生活における意欲やキャリア活動への考えとどのように関連するのかについて検討された。Bandura(1995)によると、強固な自己効力感の形成には、忍耐強い努力によって障害に打ち勝つ体験が必要となり、また、そのような困難への挑戦心は自己効力感によって下支えされているような相互的な関係性が、自己効力感とグリットの両者にはあると考えられる(竹橋・島井, 2017)。向居他(2022)の結果、まず、向居他(2021)の指摘した通り、自己効力感が高い学生は、全般的に汎用的技能の自己認知も高いことが示された。また、自己効力感とグリットの効果を統制した上で、汎用的技能と大学生活における諸活動への意欲の関連性を検討したところ、授業に参加する意欲、資格・就職関連勉学、および、人間関係形成に関わる意欲には、特に「社会関係形成・参画力」が関与すること、アクティブ・ラーニングを用いた授業に参加する意欲、授業に関連する勉強に取り組む意欲、教員へ質問する意欲には、「自己主張・リーダーシップ力」が関係すること、そして、授業に関係しない勉学や就職活動準備への意欲、そして、就職希望職種の設定には、特に「創造的問題解決力」が関係することなどが明らかになった。すなわち、向居他(2022)の結果から、向居他(2021)と同様に、学生が自分自身の汎用的技能を自覚することは、その技能が有効活用できる活動への意欲的参加の原動力となることが示唆された。

このような大学入学当初の自己効力感やグリット、ならびに、汎用的技能の自己認知は、高校生活における諸活動の取り組み状況といったような大学入学以前の個人的経験によって形成されると考えるのが妥当であろう。これらの個人特性や汎用的技能は、どのような高校生活によって涵養されるのであろうか。このことに関連して、東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所(2019)は、高校生活の過ごし方と高校生活の満足度の関連性について検討した。その結果、高校生活に満足している生徒は、授業だけでなく、学校行事や友達付き合いに積極的で、自分自身で設定した目標だけでなく、仲間と一緒に目標を達成した経験や何かに夢中になった経験を有していることが示された(野崎, 2020も併せて参照)。このような高校生活における諸活動に主体的・積極的に関与することによって、それぞれの活動において一定の成果を取めることにつながり、高校生活に対する満足感が高まるとともに、自己効力感やグリットといった個人特性が育まれ、そして、汎用的技能が形成されると仮定される。また、国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2011)は、キャリア教育を通して中心的に育成すべき力として「基礎的・汎用的能力」を提示しており、どのようにして高校生の汎用的技能が育成されるのかについて理解することは、中等教育におけるキャリア教育の観点からも非常に重要な課題である。したがって、本研究は、「高校生活における充実感」を個人が高校生活における諸活動に主体的・積極的に取り組んだことを示す指標とし、各活動における充実

感と大学入学当初の汎用的技能、自己効力感、および、グリットとの関連性を検討することで、高校生活の過ごし方が汎用的技能にどのように影響するかについて検討することを目的とした。

2. 方法

2-1. 調査対象者・調査時期・実施方法

広島県内に所在する公立大学の2021年度新入生214名、および、2022年度新入生217名に対して、大学入学年度4月にWeb調査(Microsoft Formsを利用)への協力依頼を電子メールで行った。その際に、本研究への協力を同意したと判断される者を調査対象者とした。在学中に追跡調査が実施されるために大学から個人に付与されるメールアドレスが回答内容とともに送信されること、回答内容は個人が特定されない形式で処理されたうえで大学の教育環境改善に利用されること、また、回答内容が学業成績に影響することは一切ないことなどをメールの本文、および、添付ファイルの本文で説明した。これらについて了承したうえで、調査協力を同意する場合には、提示したWeb調査のURLあるいはQRコードから調査ページに移動し、画面の指示に従って回答をするように依頼した。結果的に、対象となった新入生のうち回答のあった者316名(2021年度180名：男性44名、女性135名、無回答1名；平均年齢=18.1歳、 $SD=0.43$ 、範囲=18-21歳、および、2022年度136名：男性34名、女性100名、無回答2名；平均年齢=18.1歳、 $SD=0.59$ 、範囲=18-23歳)を分析対象とした。

2-2. 調査内容

調査内容は、植村・向居(2020)の大学1年生対象の調査に基づいて作成された。それらは、①高校生活の諸活動における充実感(7項目)、②大学生活の重点(1項目)、③大学生活の諸活動における意欲(13項目)、④キャリア活動(2項目)、⑤植村・向居(2020)の汎用的技能尺度(8因子41項目)であり、本研究では、①と⑤のデータを利用して分析が行われた。また、自己効力感の指標として、三好(2003)の人格特性的自己効力感尺度、そして、困難への挑戦心(グリット)の指標として、日本語版グリット尺度(竹橋他, 2019)が使用された。調査回答の質を向上させるために、Web調査での回答開始前に、真面目に回答するという宣誓を回答者に求めた(e.g., 増田・坂上・森井, 2019)。以下において、本研究で分析に用いられた調査内容の詳細を記す。

高校生活の諸活動における充実感 「あなたの高校生活はどのくらい充実していましたか」という問いのもと、「高校生活全般」、「学業」、「友人関係」、「高校の教師との関係」、「部活動」、「学校外の活動(趣味の活動、ボランティアなど)」、「アルバイト活動」のそれぞれの項目に対して、『(1)まったく充実していなかった』～『(5)とても充実していた』の5件法で評定を求めた。この指標は、高校生活におけるこれらの活動において、その結果に十分な手ごたえが感じられ、精神的に満足している状態の程度を示すと考えられる。

汎用的技能 植村・向居(2020)の汎用的技能尺度への回答を求めた。この尺度は、先述したように、「社会的関係形成・参画力」(10項目)、「創造的問題解決力」(4項目)、「自己主張・リーダーシップ力」(5項目)、「批判的思考力」(6項目)、「専門知識・知的面での自信」(4項目)、「母語運用力」(4項目)、「外国語運用力」(4項目)、「情報リテラシー」(4項目)の8因子、計41項目で構成されている。調査対象者には、それぞれの項目に対して、『(1)まったく身についていない』～『(5)非常に身についている』の5件法で評定を求めた。

自己効力感 人格特性的自己効力感尺度(三好, 2003)への回答を求めた。この尺度は、人間の主観的な感覚に焦点を当て、たいていのことはできるような気がするという感覚そのものを直接的に測定する主観的な感覚としての特性的自己効力感を測定することを目的として作成されたものであり、1因子構造を示し、6項目で構成されるものである。調査対象者には、各項目に対して、『(1)まったく当てはまらない』～『(5)非常に当てはまる』の5件法で評定を求めた。

グリット 日本語版グリット尺度(竹橋他, 2019)への回答を求めた。この尺度は、同じ目標に長きにわたり努力を投入する情熱に関する「興味の一貫性」因子(6項目)と、目標に対して努力し続ける粘り強さに関する「努力の粘り強さ」因子(6項目)の2つから構成される。調査対象者には、各項目に対して、『(1)全く当てはまらない』～『(5)非常に当てはまる』の5件法で評定を求めた。

3. 結果と考察

高校生活における充実感、大学入学当初の自己効力感、グリット、汎用的技能尺度の各因子の平均値と標準偏差をTable 1に、そして、高校生活における充実感と大学入学当初の汎用的技能、自己効力感、および、グリットとの相関分析結果をTable 2に示した。以下の相関係数の分析については、 $0 \leq |r| \leq 0.2$ を「ほとんど相関なし」、 $0.2 < |r| \leq 0.4$ を「弱い相関あり」、 $0.4 < |r| \leq 0.7$ を「比較的強い相関あり」、 $0.7 < |r| \leq 1.0$ を「強い相関あり」と記述する(吉田, 1998参照)。

まず、自己効力感は、高校生活全般、学業、友人関係、教師との関係における充実感との間に有意な弱い相関を示した。また、グリットとは、学業、および、教師との関係における充実感との間に弱い相関が認められた。

次に、汎用的技能については、学業の充実感とすべての汎用的技能との間に有意な正の弱い相関が認められた。また、教師との関係における充実感もまた、「情報リテラシー」を除くすべての汎用的技能との間に有意な正の弱い相関を示した。その他、友人関係における充実感は、「社会関係形成・参画力」、「創造的問題解決力」、「自己主張・リーダーシップ力」、「母語運用力」との間に、学校外の活動は、「創造的問題解決力」、「自己主張・リーダーシップ力」、「母語運用力」、「情報リテラシー」との間に弱い相関が示されたが、部活動の充実感については、「社会関係形成・参画力」との間に弱い相関を示したのみであった。最後に、アルバイト活動とは、いずれの汎用的技能との間にも有意な.20以上の相関は示されなかったが、その評定平均値の低さ(Table 1)からもわかるように、そもそも高校生活においてアルバイト活動自体がそれほど積極的に行われていないことがその理由の一つとして挙げられるだろう。

続いて、大学入学当初の自己効力感やグリットが高校生活における諸活動を通じて形成されたと仮定し、高校生活における充実感の各項目(高校生活全般を除く)を説明変数、自己効力感とグリットそれぞれを目的変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。その結果、まず、自己効力感には、友人関係($\beta=.19$)、学業($\beta=.19$)、学校外の活動($\beta=.12$)が有意な正の関連性を示した($R_{adj}^2=.15$, $F(3, 309)=14.09$, $p<.001$)。そして、グリットには、学業($\beta=.32$)、部活動($\beta=.15$)、学校外の活動($\beta=.12$)が有意な正の関連性を示した($R_{adj}^2=.15$, $F(3, 309)=19.23$, $p<.001$)。つまり、自己効力感は、友人関係、学業、そして、趣味やボランティアといった学校外の活動への取り組み、また、グリットは、学業、部活動、学校外の活動への熱心な取り組みで育成される可能性が示唆された。これら2つの個人特性に共通して影響を及ぼすことが示唆されたのは、学業への熱心な取り

Table 1 高校生活における充実感、大学入学当初の自己効力感、グリット、汎用的技能尺度の各因子の平均値(SD)

項目名	平均値 (SD)
人格特性的自己効力感	3.19 (0.81)
グリット	2.93 (0.56)
高校生活における充実感	
高校生活全般	4.32 (0.76)
学業	3.93 (0.89)
友人関係	4.48 (0.71)
教師との関係	4.04 (0.89)
部活動	3.80 (1.29)
学校外の活動 (趣味、ボランティアなど)	3.66 (1.12)
アルバイト活動	1.66 (1.07)
汎用的技能尺度	
社会関係形成・参画力	3.95 (0.55)
創造的問題解決力	3.36 (0.76)
自己主張・リーダーシップ力	3.17 (0.88)
批判的思考力	3.53 (0.61)
専門知識・知的面での自信	2.66 (0.78)
母語運用力	3.86 (0.71)
外国語運用力	2.95 (0.88)
情報リテラシー	2.99 (0.96)

Table 2 高校生活における充実感と大学入学当初の人格特性的自己効力感、グリット、汎用的技能尺度の各因子との相関分析結果

	自己効力感	グリット	汎用的技能							
			1. 社会関係形成・参画力	2. 創造的問題解決力	3. 自己主張・リーダーシップ力	4. 批判的思考力	5. 専門知識・知的面での自信	6. 母語運用力	7. 外国語運用力	8. 情報リテラシー
人格特性的自己効力感	—	.424**	.457**	.489**	.582**	.347**	.371**	.323**	.333**	.134*
グリット	.424**	—	.531**	.374**	.355**	.250**	.263**	.248**	.229**	.134*
高校生活における充実感										
高校生活全般	.235**	.101	.233**	.154**	.250**	.167**	.114*	.242**	.120*	.121*
学業	.247**	.348**	.403**	.300**	.316**	.243**	.206**	.263**	.220**	.213**
友人関係	.260**	.144*	.280**	.214**	.291**	.163**	.164**	.258**	.157**	.030
教師との関係	.212**	.201**	.315**	.338**	.339**	.257**	.202**	.316**	.227**	.177**
部活動	.128*	.187**	.231**	.102	.128*	.098	.055	.084	.014	.084
学校外の活動	.179**	.163**	.145**	.201**	.278**	.090	.197**	.225**	.155**	.203**
アルバイト活動	.096*	.031	.020	.071	.106*	.030	.166**	.108	.058	.089

** $p < .01$, * $p < .05$

組みと趣味やボランティアといった学校外の活動への熱心な取り組みであった。学業については、高校生の「本分」として社会的に認識されている活動である。特に、大学進学者(本研究の調査対象者)においては、大学入試という「困難」に打ち勝つために、教師からも保護者からも熱心に取り組むように求められる活動であることから、「忍耐強い努力」を継続することが求められる活動であるという認識があるだろう。そして、試験などによって、学業への忍耐強い努力の結果(もしくは、それに帰属されるもの)に対するフィードバックが与えられる経験を通して、ある一定の成果を収めたと感じた者については、自己効力感の向上が促進される可能性があると考えられる。また、学校外の活動は、本来的には、個人が個人の意味により積極的に取り組んでいると考えられる活動であり、忍耐強い努力を継続することが可能であり、他者からの評価によるフィードバック(賞の受賞、資格の獲得、活動に対する感謝など)を与えられるような活動であるのと同時に、自己強化的なフィードバックが与えられる活動である可能性もあるだろう。学業、および、学校外の活動のこのような特徴から、これらの活動に熱心に取り組むことにより、自己効力感、ならびに、グリットの向上に対する影響が認められと推察される。

さらに、自己効力感とグリットの効果を統制したうえで、高校生活における充実感と汎用的技能の関連性を検討するために、自己効力感、グリット、高校生活における充実感を説明変数、各汎用的技能を目的変数とした重回帰分析(自己効力感とグリットは強制投入、高校生活における充実感)はステップワイズ法で変数選択を行った(Table 3)。その結果、まず、大学における正課内・外の勉学への意欲や人間関係形成に関わる意欲に関連するとされる「社会関係形成・参画力」(向居他, 2021)には、自己効力感やグリットのみならず、学業、教師との関係、部活動、友人関係における

Table 3 人格特性的自己効力感、グリット、高校生活における充実感と汎用的技能尺度の各因子の重回帰分析結果(自己効力感とグリットを強制投入、汎用的技能はステップワイズ法)

	汎用的技能							
	1. 参画力 社会関係形成・	2. 創造的問題解決力	3. リーダーシップ力 自己主張・	4. 批判的思考力	5. 専門知識・ 知的面での自信	6. 母語運用力	7. 外国語運用力	8. 情報リテラシー
人格特性的自己効力感	.21**	.36**	.47**	.26**	.29**	.22**	.27**	.05
グリット	.34**	.18**	.07	.10†	.12*	.09	.08	.02
高校生活における充実感								
学業	.17**	—	.11*	—	—	—	—	.18**
友人関係	.08†	—	—	—	—	—	—	—
教師との関係	.10*	.23**	.15**	.18**	.11*	.22**	.14**	—
部活動	.09*	—	—	—	—	—	—	—
学校外の活動	—	—	.14**	—	—	.12**	—	.17**
アルバイト活動	—	—	—	—	.12*	—	—	—
R^2	.43**	.33**	.42**	.16**	.19**	.16**	.14**	.08**
調整済み R^2	.42**	.32**	.41**	.15**	.17**	.20**	.13**	.07**

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$ (値は標準偏回帰係数(B))

充実感といった多くの項目が正の関連性を示した ($R_{adj}^2 = .42$, $F(6, 306) = 38.65$, $p < .001$)。また、「社会関係形成・参画力」に加えて、人間関係形成に関わる意欲に参与するとされる「自己主張・リーダーシップ力」(向居他, 2021)には、学業、教師との関係、学校外の活動が正の関連性を示した ($R_{adj}^2 = .41$, $F(5, 307) = 44.47$, $p < .001$)。このことは、様々な高校生活における取り組みを通じて、これらの能力が形成されることを示唆している。

本研究結果から、大学入学時の汎用的技能の自己認知に最も関連する項目は、教師との関係における充実感であり、「情報リテラシー」を除くすべての汎用的技能で参与していること、そして、学業の充実感が、「社会関係形成・参画力」、「自己主張・リーダーシップ力」、「情報リテラシー」に関連していることが示された。これらの結果は、汎用的技能の育成における、高校生活における生徒と教師のかかわりの重要性、そして、勉学への熱心な取り組みの重要性を示唆するものであると考えられる。ここで特筆すべきは、やはり、教師との関係の充実感が、様々な汎用的技能の自己認知に正の影響を及ぼしていたことだろう。高校生活を送る生徒にとって、最も重要な教師の役割は、生活面における生徒指導もさることながら、やはり、学業面における指導だと考えられる。教師との関係性に充実感を見出した生徒は、教師からの十分な学習指導を受け、そして、その中で良好な人間関係を構築しながら、また、思春期における「重要な他者」である教師(中井・庄司, 2006)の行動を手本としながら、様々な汎用的技能を身に着けると同時に、このような関わりを通して、教師との関係性に充実感を見出した可能性があると考えられる。

4. まとめと今後の課題

大学入学当初の汎用的技能、そして、自己効力感やグリットは、大学入学以前の経験により形成されると考えられる。本研究は、個人が高校生活における諸活動に主体的・積極的に取り組んだことを示す指標として高校生活における充実感を上げ、高校生活の諸活動における充実感と大学入学当初の汎用的技能、自己効力感、および、グリットとの関連性を検討することを目的とした。本研究結果をまとめると、まず、自己効力感には、友人関係、学業、学校外の活動(趣味やボランティアなど)の充実感が関連すること、そして、グリットには、学業、部活動、学校外の活動の充実感が関連することが示された。そして、汎用的技能のうち、大学における正課内・外の勉学への意欲や人間関係形成に関わる意欲に参与するとされる「社会関係形成・参画力」には、自己効力感やグリットのみならず、学業、教師との関係、部活動、友人関係における充実感といった多くの項目が関連すること、そして、この「社会関係形成・参画力」に加えて、人間関係形成に関わる意欲に参与するとされる「自己主張・リーダーシップ力」には、学業、教師との関係、学校外の活動といった項目が関連することが明らかになった。これらの汎用的技能の形成に共通して参与すると考えられるのは、高校の教師との関係における充実感、そして、学業の充実感であった。特に、教師との関係における充実感が多くの汎用的技能の自己認知に関連していることが示された。

また、本研究では、自己効力感やグリットの向上には、学業に熱心に取り組むことが重要であることが示され、また、汎用的技能でも「社会関係形成・参画力」や「自己主張・リーダーシップ力」といったような、いわゆる「コミュニケーション能力」と称される可能性のあるものには、高校生活において学業に熱心に取り組むことがその自己認知を高めることが示唆されたが、その理由の一つとして、学業が高校生の「本分」とされ、高校生が、社会から熱心に取り組むことが求められる主たる

活動であり、学業に実直に、熱心に取り組んだ結果、ある一定の成果を収めることに大きな社会的評価が置かれていることがあると推察される。そして、本研究結果において、高校生活における教師との関係の充実感が、様々な汎用的技能の自己認知に影響を及ぼしていることが示唆されたことは非常に重要な結果であると考えられる。国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2011）は、キャリア教育を通して中心的に育成すべき力として「基礎的・汎用的能力」を提示しているが、学業指導などの教師とのかかわりを通じて、教師が生徒の良き手本となることで、生徒は、社会で有用となる汎用的技能を身につけている可能性があるだろう。もしこの推論が正しいならば、教師は生徒の手本となるために、適切な汎用的技能を身に着けている必要があると考えられるし、また、汎用的技能の育成の観点からも、教師とのかかわりに積極的でない生徒に対しても、教師のほうから積極的に関係性を築いていくことで、生徒のキャリア発達を促す必要があると考えられる。したがって、大学の教職課程においては、教職志望者に対して、より明示的な汎用的技能に関する指導が望まれるかもしれない。また、どのような教師とのかかわりが、生徒や学生の汎用的技能を高めているのかについて、より詳細に検討する必要があるだろう。

最後に、向居他(2022)も指摘しているように、2020年初頭以来、コロナ禍によって社会情勢が大きく変化したことが高校生活や大学新入生の考え方に変化をもたらしている可能性もある。ここ数年に取得したデータの分析結果に関する解釈には慎重を期すべきであろう。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

付記

本研究の一部は以下で発表された。

向居 暁・佐藤 純 (2022). 高校生活における充実感と大学初年次生における汎用的技能、自己効力感、グリットとの関連性 日本教育工学会2022年秋期全国大会(第41回)講演論文集, 321-322.

引用文献

- Bandura, A. (1995). *Self-efficacy in changing societies*. New York: Cambridge University Press.
- Eskreis-Winkler, L., Gross, J. J., & Duckworth, A. L. (2016). Grit: Sustained self-regulation in the service of superordinate goals. In K. D. Vohs & R. F. Baumeister (Eds.), *Handbook of self-regulation: Research, theory and applications* (3rd ed., pp. 380-395). New York: Guilford.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2011). キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書 <http://id.nii.ac.jp/1296/00000346/>
- 増田 真也・坂上 貴之・森井 真広 (2019). 調査回答の質の向上のための方法の比較 心理学研究, 90, 463-472.
- 三好 昭子 (2003). 主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度 (SMSGSE) の開発 発達心理学研究, 14, 172-179.

- 向居 暁・植村 広美 (2020). 大学生の汎用的技能に関する研究(2)—大学生生活の過ごし方と汎用的技能の関連性— 県立広島大学総合教育センター紀要, 5, 25-38.
- 向居 暁・植村 広美・佐藤 純 (2021). 大学生の汎用的技能に関する研究(4)—大学初年次生の汎用的技能と大学生活における意欲の関連性— 県立広島大学大学教育実践センター紀要, 1, 7-15.
- 向居 暁・佐藤 純・植村 広美 (2022). 大学生の汎用的技能に関する研究(5)—自己効力感とグリットが考慮された大学初年次生の汎用的技能と大学生活における意欲の関連性— 県立広島大学大学教育実践センター紀要, 2, 11-23.
- 中井 大介・庄司 一子 (2006). 中学生の教師に対する信頼感とその規定要因 教育心理学研究, 54, 453-463.
- 成田 健一・下仲 順子・中里 克治・河合 千恵子・佐藤 眞一・長田 由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討 教育心理学研究, 43, 306-314.
- 野崎 友花 (2020). 高校生活の振り返りと進路選択—「卒業時サーベイ」の主な結果から— 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所(編)子どもの学びと成長を追う—2万組の親子パネル調査から— (pp.95-111)勁草書房
- 小方 直幸 (2008). 学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム 高等教育研究, 11, 45-64.
- 竹橋 洋毅・樋口 収・尾崎 由佳・渡辺 匠・豊沢 純子 (2019). 日本語版グリット尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 89, 580-590.
- 竹橋 洋毅・島井 哲志 (2017). 困難への挑戦心を支える認知的基盤—領域自尊心に着目して— 関西福祉科学大学紀要, 21, 99-106.
- 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 (2019). 高校生活と進路に関する調査2018—高校生活の振り返り・高校生の成長— 株式会社ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
- 植村 広美・向居 暁 (2020). 大学生の汎用的技能に関する研究(1)—汎用的技能尺度の作成の試み— 県立広島大学総合教育センター紀要, 5, 17-24.
- 植村 広美・向居 暁 (2021). 大学生の汎用的技能に関する研究(3)—大学1年生から4年生までの汎用的技能の比較— 県立広島大学大学教育実践センター紀要, 1, 1-6.
- 山田 剛史 (2018). 大学教育の質的転換と学生エンゲージメント 名古屋高等教育研究, 18, 155-176.
- 吉田 寿夫 (1998). 本当にわかりやすいすごく大切なことが書いてあるごく初歩の統計の本 北大路書房

